

パーソナリティ特性別のスポーツや身体活動に関する 行動習慣の変化に関する調査

○鈴木 聡一, 中山 依香, 藤田 依久子

(山陽学園大学 総合人間学部 生活心理学科)

背景

2020年より流行したCOVID-19の影響で、東京五輪は2021年に延期され、それに続く北京五輪も2022年に予定通り開催こそされたが、世論は様々な意見が飛び交っていた。

目的

本研究では、態度やパーソナリティにより程度の大小はあるものの、アスリートの姿を通して観た人の態度変容や、態度変容を通じて行動習慣を引き起こすナッジとなり得ることが示された先行研究¹⁾を援用し、東京五輪・北京五輪を受け、日本人の日常的な運動・スポーツ習慣の変化に関する調査を行い開催前と後では人々の行動をどう変容させたのかを明らかにすることを目的とした。

方法

調査方法：Google フォーム（5 件法）

調査の対象者：都道府県別 6 地域における高校生、大学生、専門学生、社会人（男性：58 名、女性：74 名、その他：1 名、平均年齢：20.4 歳）

調査期間：2022 年 8 月～2022 年 11 月

質問紙内容：先行研究¹⁾を参考に独自に作成した。基礎情報（性別、年齢、職業、所属先、住まい）、パーソナリティ、感染拡大前と現在（五輪後）を比較した運動量に関する全 90 問。

結果・考察

東京五輪	肯定的 態度	否定的 態度	N/A	合計
行動変容あり	20 名	11 名	4 名	35 名
行動変容なし	47 名	29 名	22 名	98 名
合計	67 名	40 名	26 名	133 名

Table.1 東京五輪に関する態度別行動変容数

東京五輪は 56 年ぶりということや若きアスリートが出場するという期待もあり、開催にポジティブな態度を持っていた人数は多かったのだと考えられる (Tab.1)。

北京五輪	肯定的 態度	否定的 態度	N/A	合計
行動変容あり	15 名	6 名	8 名	29 名
行動変容なし	26 名	22 名	56 名	104 名
合計	41 名	28 名	64 名	133 名

Table.2 北京五輪に関する態度別行動変容数

北京五輪は冬季で、今回のアンケート対象者に日本人が多いことから、開催に興味がない人が多く見られたと考えられる (Tab.2)。

東京五輪と北京五輪の両者に言えることは、行動変容の有無の要因に、政府からの行動規制を求める政策によりスポーツ施設が閉鎖されたことで、運動をする場所が減少したという外的要因があると考えられる。また、この状況下でも行動変容が見られたことから、個人の内発的な動機付けによる態度変容を通じたものと分かり、行動変容の有無の要因に、個人の内的要因もあると考えられる。今後の展望として、調査で得られたデータをもと FGI を実施し、SCAT(Steps for Coding and Theorization) を使用し、質的解析を実施していきたい。

参考文献

¹⁾ 藤田依久子, 工藤裕子, 酒折文武 (2022) 東京五輪 2020 のレガシーとしてスポーツ習慣の意識・行動変容, 日本心理学会第 86 回大会抄録集